



豹祭獸

李由が引よ獅子の祭

熊栗架と搔

栗の指よ熊の
搔むとつこ

爵入大水為蛤

化して潜物と

我果はらも

○崩魚

深

○綱代打
細代は冬に志るま
とも九月九日のお

代付序ももまるゆ

○番綿

○番船「抄妙大板」
り江ア「核出を
飾くその廻叙よ一書二書三書の名

ありて江アの洋の正速とい
換蓋を宣むゆえに番綿と云

胡黎

○赤
九月野外「群とるんも
つほよあつてん布とつふ

秋は後

「秋より後」
行秋書

の秋

秋の善、秋の夕
善に雁志とる

秋の限

「秋の限」
残「秋を惜む



秋の湊 秋の湊は秋の月を以て
○秋の湊 秋の湊は秋の月を以て
○九月盡 九月盡は九月の終りを以て

○冬 冬は終之物終るを以て
○立冬 立冬は十月の終りを以て

應鐘 應鐘は十月の終りを以て

○小雪 小雪は十月の終りを以て

十月 十月は十月の終りを以て

初冬 初冬は十月の終りを以て

○初霜月 初霜月は十月の終りを以て

更衣 更衣は十月の終りを以て

冬 冬は十月の終りを以て

冬 冬は十月の終りを以て

冬 冬は十月の終りを以て

冬 冬は十月の終りを以て

冬 冬は十月の終りを以て

冬 冬は十月の終りを以て

冬 冬は十月の終りを以て

冬 冬は十月の終りを以て

冬 冬は十月の終りを以て

冬 冬は十月の終りを以て

冬 冬は十月の終りを以て

冬 冬は十月の終りを以て

冬 冬は十月の終りを以て

冬 冬は十月の終りを以て

冬 冬は十月の終りを以て

さす末の日亥の初旬と食ハ八病を
一尾ハ開化十年十月但馬國より初
て餅と炊むとまゐるの ○達磨忌
この餅の始りといふ

五日達平ハ南天竺の人初め深
入る武帝契まじ江と波て魏に入
り嵩山に居る九年と経て西域に
飯る深の大石二年十月五日入寂代
宗謚して明
○射場始 天子射場
覚大師といふ

ありて云々以下の射藝と云々あるな
り先代旧本本丸成公事根原は二百と云
残菊の宴 五日延喜の法代より初
る群臣待とつらり候
と初ふといふ

○興福寺法花會

一名山階まじり九月晦日より十月
六日まで妙法の大會とひらじむ
成大會ハ因陀冬嗣公初めハ六日ハ
冬嗣公の父長岑大臣の侍忌日とあり
るゆゑその
○十夜 この月五日よ
り十五日までの
万部王宮の法事
○絳摩手會 十
日金武と初るといふ

より十六日と南郊真福まじり於て
こまを供せ大職冠の忌日といふ ○

金毘羅祭

十日讃州務志郡に
ありある林一座三
輪大明神或ハ素鳥等高山の形系
の形に似たるかよふ山と号せ

芭蕉忌

十二日芭蕉庵枕まじり伊
ともの人まじり倍姓松尾氏
袖の名ハオセ後ハ忠左工門宗茂と
改む後江戸に居りて他階と名あ
り元禄七年十月十二日痢疾を患て
難波の祿亭に没せ其角去末大州
笠室殿とちりて大津

御景供

の養仲ち葬るとあり ○
十三日又所命攝政公金武
と稱せ日蓮上人の忌日 ○下元

水官

十五日水官人の善悪を
とて一以て天帝に奏せ
厄を解せ

○聖一忌

十七日洛の赤福寺の
開山忌ありと日方丈
に什物をうさり午後聖一の像を腰
裏にまき候事 弥檀まき音

辨當納

辨當納 辨當納の人の名を
日の今日と年中遊山の終

りしきる ○御取越 一向宗門此
な名づく 後この月祝

書上人忌を終る忌日ハ
○夷講の 十二月よりあまうくい

月廿日或ハ家例ニ依テ日定ラニ高
栗の徒西宮大津宮と念るこの津高

栗とよク ○誓言文拂 六日尾ハ夷講
ふちる 高志山海

の珍味とさうり酒宴を及ク年中出
此の酒の花主或ハ此の人の指さ

登登を尾と誓言文拂といふ尾ハ高
人出ク敷ク夢の尻と掛ふゆゑ

る終茶師小ハ官者多ク号して末極
四条通り又この乃と念る津社あり

○法勝 尾と誓言文拂の社とよク又
大坂にてハを室の戎の社と念る

寺大衆會

北四日より九八日と念
仁のころあハ後より

本寺の茶師ハハ
後下西教あり ○大社の神事

十一日より十七日と大社杵築大神
宮ハ出雲國神門郡杵築村あり

り念る林大己貴考孝安天皇三十
二年無跡毎年神祭七十二度就中

十月ハ終上泳秘の念りといふ凡十月
十一日より十七日と念る杵築の同

尾烈しく波荒三日一蛇化度て藤葉
交て海上に波む尾ととりて曲物小

登り林多し御むとよりその蛇蝦
蛇よりハ蛇の班文あり尾先魚

尾と似て岐さく屈曲して宇智津
のこじ尾林系才とてまらもの

梅尾虫供養

梅尾寺ハ明恵上
人の開主として代

長ハ北 ○口切 三月に茶を搦五六
八日と 月以壺に持てあ

小山一上九月に法水一出と十月
小ハ茶人壺の口とひらくゆゑと口

切 ○初霜 早霜。靄。初霜
消る。靄の禱。靄

の茶。靄。霜崩 葉 霜相折
く。靄の初

企 霜相折 葉 霜相折
上 霜相折 葉 霜相折

日る者の中を代ちようらうも
さのかく括めり ときあり ○時

雨 又霽雨と云ふ。時雨也。村志

ふき 雨のこぼれをいふ。涙の志

くま 雨のこぼれをいふ。川音

時雨 松風の時雨。川音松風の

夜時雨 片時雨。一方、これ一方

横時雨 風よあつてよま

時雨 凡の 木枯 魁。風とつみ

液雨 唐風 中倍

初雪 初

初雪の見恭 群臣奉内幸ら

初氷 初氷解

冬牡丹 八月より

名草枯 十月より冬開く

冬椿 早咲椿。椿

大葉の花

寒菊 小葉の

八手の花

茶の花

山茶花 其の葉飲てなを

寒梅 梅

水

仙花 千葉あり 葉あり一
○枇 重の枇落向く葉の葉を

杷の花 白き葉中て八月より咲く
め十月に葉まで篠月まで

榧の花 木を畑として牧
やうと長るゆゑ

○散紅葉 ○名の草枯

○散紅葉 ○名の草枯

○散紅葉 ○名の草枯

○散紅葉 ○名の草枯

○散紅葉 ○名の草枯

○散紅葉 ○名の草枯

○散紅葉 ○名の草枯

○散紅葉 ○名の草枯

○散紅葉 ○名の草枯

○散紅葉 ○名の草枯

○散紅葉 ○名の草枯

○散紅葉 ○名の草枯

○散紅葉 ○名の草枯

○散紅葉 ○名の草枯

○散紅葉 ○名の草枯

○散紅葉 ○名の草枯

○散紅葉 ○名の草枯

○散紅葉 ○名の草枯

○散紅葉 ○名の草枯

○散紅葉 ○名の草枯

○散紅葉 ○名の草枯

○散紅葉 ○名の草枯

○散紅葉 ○名の草枯

○散紅葉 ○名の草枯

○散紅葉 ○名の草枯

○散紅葉 ○名の草枯

○散紅葉 ○名の草枯

○散紅葉 ○名の草枯

○散紅葉 ○名の草枯

○散紅葉 ○名の草枯

○散紅葉 ○名の草枯

○散紅葉 ○名の草枯

○散紅葉 ○名の草枯

○散紅葉 ○名の草枯

○散紅葉 ○名の草枯

○散紅葉 ○名の草枯

○散紅葉 ○名の草枯

○散紅葉 ○名の草枯

○散紅葉 ○名の草枯

○散紅葉 ○名の草枯

○散紅葉 ○名の草枯

○散紅葉 ○名の草枯

○散紅葉 ○名の草枯

○散紅葉 ○名の草枯

○散紅葉 ○名の草枯

○散紅葉 ○名の草枯

○散紅葉 ○名の草枯

○散紅葉 ○名の草枯

○散紅葉 ○名の草枯

○散紅葉 ○名の草枯

○散紅葉 ○名の草枯

○散紅葉 ○名の草枯

○散紅葉 ○名の草枯

○散紅葉 ○名の草枯

○散紅葉 ○名の草枯

○散紅葉 ○名の草枯

○散紅葉 ○名の草枯

○散紅葉 ○名の草枯

○散紅葉 ○名の草枯

○散紅葉 ○名の草枯

○散紅葉 ○名の草枯

○散紅葉 ○名の草枯

○散紅葉 ○名の草枯

○散紅葉 ○名の草枯

○散紅葉 ○名の草枯

○散紅葉 ○名の草枯

○散紅葉 ○名の草枯

○散紅葉 ○名の草枯

○散紅葉 ○名の草枯

○散紅葉 ○名の草枯

○散紅葉 ○名の草枯

○散紅葉 ○名の草枯

雨とき風の交 **雪吹倒** 是山
るなりくより

雪の **雪作** 雪の作ら
増山の井よ出より

時雷よまよ夜まるこ **雪竿** お城
多く小地よありとそ

竹竿よ法経小立て雪の **雪やけ**
除サと知ると雪竿とよこ

雪を **雪圍** **雪轉**
りふ山のこれより

仏の雪の名袋の雪を **雪**
雪獅子の雪中小児の戯よ是と

方を **雪礫** 雪打塔雪中の
り

の山 **雪車** 是ハ山城の人
雑り

推るの具之本を以てこれと **綱貫**
作るその形輪雪車の也

水地の人雪中よ **雪履** **雪女**
用る知の雪鞋

山中枝雪を凝て雪 **雪蛆** 雪の蛆
と方をものるり

と以てこ **雪の肌** 美人よい
り

士の雪 こまハ分よりてまとし
かり雑もなる

霜氷氷の轄 **氷柱**
霜の凍用

氷 是ハも根とも同トものみ
ら分ハ氷とのよあり

蒼下雷の **氷の声** 大雪の時
水を不まる

氷の鏡 水の鏡よ似
あり

雲 おまとる **散雲** 電
ハ

人散似て大ちるものに但散雪
くて雨電ハさらに散ハ暗の

暗やはと **散酒** 南都の産に又
酒ともいふ

酒中散よ似 **散地の錦** 石置の
る積あり

錦とい **散金** **散餅** は散生
ふかり

とととと季ともも **凍** **氷** **電** **手**
さららバ冬成じ

の薬 さららバ冬成じ **凝** **固** **め**
の薬さららバ冬成じ

加二名 鷹の 雁匠 ○追

鳥狩 列卒を以稚子より外を
一ツの香を追出ーとる○

鳥叫 氣鷹を呼ぶ又村人の声
とあげて香を追立るとし

翦鷹 ○偷立鳥 小かく

○ゆきこつ香 追立る香の香よふ
そきて竊まらると云

○茂上草 香よあつて香の後
ふびと死ぶ香さう

○洛草 香の香とくは片足
追立る

力草 香の香とくは片足
ふて香を柱に立

○ゆめ香 骨は小香と
くは片足とあ

○列卒繩 康猫は
繩を引

○鷹犬 ○

狩杖 持ツ杖なり 狩場 ○真

柴騎 徳人の子うじよ
はホとさうをかり ○鴛鴦

鴛鴦 抱る合長は鴛
香を画る ○鳧 しく

鳧 黒鳧。阿伊佐
。乾鳧。湯鳧 ○あぢむら

○水鳥 浮寐

鳥 ○徳 万葉に乳香又香川
ちり。浦香。群子

○水 香。小菰ちどり。溪ふ香。破
ちり。夕波ふ香。友ちり

魚氷魚の使 山城近江水魚
網代一々不せ外

○柴漬 冬月伏
足の里

○浚取 炭を
中池

○網代 魚を取
る柵

○夜魚 宇治田上をくは氷魚を
くらんぬらう七のるり

引 きのわ中々歎を指す大を
引 引かき獵者の詞はよ引と

○生海鼠。旁海鼠 ○
鱈。鱈 ○鯧。鯧 ○牡蛎。牡蛎 ○河

豚。豚 ○西施。西施

乳。乳 ○鯨。鯨

勇魚取。伊沙那那をいふ久矣

射てを。射てを 鉸突。鉸突

○鍋焼。鍋焼

○夙吹大根。夙吹大根

○蕎麦。蕎麦

○炭團。炭團

○鷄卵。鷄卵

○綿。唐綿

○冬篋。冬篋

○十月。仲冬ハ日月比々舎して斗

○大。圍黄鐘ハ子の律と

○冬至。圍小雪の後十五日斗

○雪。圍大雪の後十五日斗

○一陽。仲冬。周正。復月。一陽。天正

○神農。仲冬。周正。復月。一陽。天正

○雪見月。仲冬。周正。復月。一陽。天正

○一陽の嘉節。仲冬。周正。復月。一陽。天正

○と書。仲冬。周正。復月。一陽。天正

○神農。仲冬。周正。復月。一陽。天正

○十月。仲冬。周正。復月。一陽。天正

○大。仲冬。周正。復月。一陽。天正

祭 冬至。唐山の人炎帝と号する茶をちりて茶を初めたり

医及の祖神を医所ありを云

○曆 十一月内の神と祀まり

の葵 綱目中葵首より明年の曆より又出清ありて是と清流ある

曆のくすまりハ欽明天皇十四年百濟の博士ガ

○宮線と添 晋魏の同

官中紅線を以日教と量る

○履 冬玉の後長きと一添を添ふ

襪と献 婦人冬至の日履と襪を男姑よしてする

○赤豆粥 冬至。共工氏の子

冬玉は死をその子の冥疫鬼と云

豆粥を食て

○あくらかき 十一月朔日赤小豆飯を

○相嘗 上卯延喜式よりお嘗祭の

祭 神七十一世ありといひ近頃ハ

終る

○宗像祭 上卯荒お必宗

はく 俗にあり

る神と云。田心娘。浦織津娘。新杵

娘の二女と云は皆素盞烏の妻と

杜本祭 上卯

○當麻祭 上卯

卒川祭 此の社ハ素戔の子也町

比して四月九日出用一の少陵之を

神洲化天皇の子也神。住吉の神

と云重之祭ハ上卯酉

○梅宮祭 日法堂ハ大和の也

○大原野祭 上卯

○中山祭 上卯

○吉田祭 中卯

○山科祭 上卯

○春日祭 上卯

○平野祭 上卯

五節帳臺の試 子月或

御 八中上卯

九十六

忌といふ心
○三嶋大明神祭 伊豆

祭ハ中ノ酉日之祭林大山祇の命祭
礼の日法玉より商人来りて法の物
を奉る是と云ある
○子祭 申祭
の市といひて奉る

○子燈心 正月の月ちる中をこの
日は大黒と云ふ二服大根黒米黒豆
をいふ
○道陸神祭 十六日。大
板天王吉村

合法辻の辺に小サき石仏あり此
仏の教は米の粉と作り供物を作
へ給ふ審相と稱して踊る是と道
陸神祭といふこの祭の二三日あよ
里村中の臺出て往來の人々供物
料をとふあふふれハ繩は泥とぬ
りて人をまきとむ俗ふ

○日陰の
ごうくじり祭といふなり

髪 くらら
日ウげの糸。日陰のかわらハ一
名とさかり昔といふ林祭の時
この昔をとりて森人林ふるまの髪
は又袖もかきりけるを今も日ウげ
の糸として奉よか

○心集 梅花三
すけ
金のかよの是貝と作
るい是と心集といふ

ひのす 式抄は太常言の時近江
の板田郡より志船の糸
りて綿を春くその時あまらき年
の始よかこころをせとよひてた
のこさとつとよふをさうとよこの
あ古々糸よ出より又糸のあまも
とよふつらさあよふのま

○阿 あ
さくこころふくおんやゆるうな

知女 是も林木の明物の名
さよ一説多し畧之
庭 庭
燎 林木の時焼まかり火處焼と
ハあとの庭燎と巻とくと林代
をいふ

○林物の系 是ハ林木を
あまらき

○大前張小前張 おんささとり
まよや

○神樂歌 は
は小儀ふるふまき
る神あといひもの

歳○早禱○吉○利○星○湯・鈔子。
木・街・街○晝・目○立○朝・氣○其・弱
○電・魚○の・身○酒・魚・子
吉・八・社・末・の・附○の・物
○山・神・祭

不○山・林・あ○る○る○木○の上○は○山○と
切○け○葉○等○と○も○も○七○夜○燦○の○余○風
友○
○御・火・燒○
火○の○月・法・社・は○社○

是○と
○吹・革・祭
八・日・祭○る○不○智○思
古○の・法・書○元○也

養○明・那○之○政・人○云○二十・九・廿・は○是○和
為○稻・荷○と○か○ふ○は○稻○の○火・燒○
ふ○十・月・八・日○銀・治・清・海○公○之○院
も○て○吹・革○と○を○扱○ふ○亦○は○八・社
社○と○ふ

○新・玉・津・島・の・火
る○なり

燒○十三・日・後・成・々○の・勅・法○五・条
南・鳥・丸○の・西○は○あり○昨・今・法・泉
家○多○く○系・信○或○は○法・泉○の○お・か・あ
り○この・門○ち○一○町○甚○く○は○社○の・氏○子
之○を○日○市○人○津・浦○と○言○ふ

○麻・賣
家○は○秋○の○時○は○酒・賣○と○扱○ふ

髮・置
世・俗○は○男・女○も○三・歳○よ・女
身○は○土・月・十・八・日○又○八・七・日○と

推○ひ○髪・置・並・條・と○て○白・髪・條○松○
櫛○の・作○り○等○未・廣・扇○を○か○と○臺○の
小○と○ゆ○ひ○さ○は○一・倍○つ○け○産・科○へ○系・信○は
る○こ○の○日○は○食・信○は○か○か○る○改○し○い○魚
并○よ○小○石○之○倍○の○ち○ち○一○付○る○是○一・生・聖
法○よ○て○萬○の○か○ら○ん○や○う○よ○く○疑○ふ

○空・也・忌
日○
○曉・の・鈴
と○ぞ

空・也・上・人・八・天・祇・三・年・九・月・十
一・日・寂・也・年・七・十・空・也・堂
極・深○と○号○を○四・条・坊・門○の○南・協・川
の○東○は○あり○鉢・扣・木・付・堂○と○言○ふ○極
深○は○八・元○之○系・信○也

場○と○稱○も○む○り○空・也・上・人○山○は○住
一○時○毎○夜○麻・布○を○上○人○の○声○を○登
一○て○閑・居○の○友○と○一○夜○あ○ら○む○心○は
是○を○怪○し○む○日○獵○者○來○り○て○云○昨○お
こ○の○中○は○鹿○と○殺○し○上○人○六○は○鹿
さ○忠○し○こ○の○皮○と○角○と○を○と○て○皮○と

素・止○角○と○杖○以○て○挿○て○遺・棄○の○物
と○も○獵○志○心○を○これ○と○疑○懼○て○奴○ら
判・製○し○て○倍○と○う○る○その○鉢・扣○ハ○その
也

○袴・着
日○
○帶・解
日○

被初 未叶より西東風の等解
よお色女児よはてめて

○酉の市 酉ノ日伊豆国
三信の孫あり

雞の町詣 酉ノ日鷄大明神の社
ハ武州葛飾郡花又

報恩講 二
人郡系一七孫あり

大師講 師を討てて天を快恨
修り是と行法風と云

智恵粥 是天台智者大
北四才也 肝の忌日之比

御祭 北七日春日若宮の祭之本社
と去るより一町をり平林の

後日の能 西下よりなる
跨るの伶人これ

掛鳥 北八日五日能より祭
礼の後五日後日の能云

宇賀 五日祭の時香焚を以贄
と是是を掛香といふ

歌舞 昨日九条東洞院
あり宇賀とていふ

顔見連見 名ハ文獻通考よりへりその儀
名ハ文獻通考よりへりその儀

冬 百

人皇七十五代崇徳天皇の由宇天下
大ニ飢饉一二年又大ニ疫癘あり
関白法性も忠通るこの祭礼の
大祭を崇徳の神より天下降るより
よりて毎冬

○日の使 春日祭
の時関白

○後日の能

○掛鳥

○宇賀

○歌舞

○顔見連見

冬 百

ふしあり祚祇友中臣ト終
ホ卒明年六月とのことト巻
〇月

次の祭日 〇神今食 十日何
月よむは十日の夜ハ幸あは時ハ

中和陸よて終つる終幸ふき時を
祚祇友よ 〇事始 八日六竹汁
て終つる その美二月

事納 〇御佛名 十九日より廿一
日迄仁寿の

寺本をどうして所出の中よけ
南の額の間又南北に机とくく依

塔形をおく仏およ香花と佛
ふ廂よ地獄妻の所風とら

つけ綿 佛名の時寺師長
〇柏

梨の勸盃 〇府の中將和
の庄と以左近府よ寄るその地利

と以官人以下酒際の料よ宛
も佛名の

〇年の終此魂祭 七月
よ回今ハこのりは〇十二月の晦日午

の時よ暮りて正月朔日卯の時よか

星佛賣

この月十三日仏工東年比
属星の形と彫て茶裡

よ秋と民間ふもみつとををね
京師の街上星仏と賣るものあり

荷前の使 十三日諸必ずり秋
湘の格と十陵公墓

御髪上 下千巻人
梳屑約りて主為寮

玉牛童子 〇玉牛童子
よ向めて焼たり

の像と立 大さの目ねす又陰陽
師土牛童子の像と門

口よまの青黄赤白黒の土牛と春夏
秋冬の色よとこひてさこ也疫病

〇著駄の政 五月は四
檢非違使

在京よて刑法を行ふ頭よあると鉦
と心呂よあると駄よふも刑具

内侍所の御神樂 天子内侍不
よ行幸所持

あり刀自祝詞やいふことあり内侍
不の前よ主為寮慢と引て官庭燎

〇寂勝寺灌頂
冬

初家吉田の斎場の内陣に於て清
後と修む神人一人にまよ後ふ正月
十九日の
○厄塚建る 節分の終
吉田神祇

官に於て行ふその式をよ上塚を
築くことと厄塚とよ正月十九日
○追儺 儺ハ以疫を張あり
去之 古人最これを重ん

ぶ一名おちやらひといふ儺ハ臘日の
は公事根元よ見えより然きせ
今ハ節分の扱とより扱むるよも
ろにふも金吾除夜進儺とあんば

名分ハ後
○鬼ハ外福ハ内
俗咒治て来るとく久一卧雲日件録
云文安四年十二月廿二日明日立春故
及昏景每室散燂豆因唱鬼ハ

外福ハ内四字云この以よりの燂ウ
○柀賣 柀 柀 柀
の既挿ふ道の改きと土佐日記
ふもふえより今ハ櫛の改を用ふ

燂豆 燂豆 燂豆
○浅草 浅草
今夜系指書中よ元乃チ初更の以鬼
形の者一人堂外よ出ツ又一人方相氏
の假面と被りたるもの尾と追て堂
と巡る後除疫の札三千枚と撒して
諸人よ與ふ来福の人各あらそひ拾
ふて持くりて自家の門戸よ貼む

○節分○年内立春○除
夜 十二月晦日これと除夜と
言ころハ此夜舊年と除く

米洗 此日よかきらむ餅米と洗ふ
一説よ元日よハ心長米と
○大歳 元日
○晚歳 元日
○餽歳 元日

○別歳 行歳 除歳 歲暮 年
○守歳 春急ぐ 年尾
○春と隣

○船神祭 小方除夜内を以船神と
祀る 益公 益婆

○大歳 元日
○晚歳 元日
○餽歳 元日

○守歳 春急ぐ 年尾
○春と隣

隣ハ近シト分歳 支那の俗除夜
ノガゴトシ 又その先人を
り長幼あつちり飲祝頌して
散ぢあま分歳といふあり ○大晦

日小ほこもり 十二月の月と
一月九日あり ○

私大 奥州南部の人十二月小の月と
生ハ翌朔日と以て晦日とす

厄穢 厄落此月と
大とすぞ 厄穢 厄落此月と

年忘 唐山より
夜朗と名づく 年忘 唐山より

胸搞 節季
中の勞と忘る 胸搞 節季

節季 二十日より
北七日まで 節季

年籠 伊勢大林宮人
年籠一九月日

孟宗竹 竹冬も竹を
そり 孟宗竹 竹冬も竹を

八目鱧取 紅海取と云ふあり
州海傍の鱧ふとるのを

取 常陸國美和の鯉常國の
取 常陸國美和の鯉常國の

塩引鮠乾鮠 塩鯉
口塩鯉 口塩鯉

市 松竹賣 淫連飾賣
子夜 松竹賣 淫連飾賣

煤掃 和漢戸十二月下旬
賣 煤掃 和漢戸十二月下旬

扎納め 初掃のれを焼
餅 初掃のれを焼

燒いし○齋いし持も物忌ものい誓言文ちげんぶん

胙ひんぎ起請おこし○氏神うぢがみ打火ひらき切き

火鎮守ひちんしゅ○三寸さんすん洗米せんまい○

繪馬えうま○矢鏑馬やぶさめうま○放生會はんじやうかい

碧船あまふね穗屋作ほゑ神かみおろし

舟玉ふねたま金かねばらら○常陸帶とちぎたし○

東遊あづまあそび乙女子おつめ○伊勢講いせこう○

初午おはつご○小忌衣おところし○庚申待こうしんまち

月待つきまち日ひまち

遷宮うつりみや 非神祇詞ひしんぎし

元方もとがた○年徳としとく○男山おとやま○

佐保姫さほひめ○竜田姫りゅうでんひめ橋姫はしひめ○

竜神りゅうじん龍宮りゅうみや○放生川はんじやうがわ○

勢せ○山伏さんぶつ○榊せき

上己かみじの核こ

尺教しゃくけうの詞ことば佛像ぶつぞう 木像。座像。立像。

後像。本尊。○元祖げんそ 開山。祖師。○門跡もんせき

院家いんけ○國師こくし○僧祿そうろく○

禪師ぜんし律師りつし長老ちやうらう上人じやうじん和わ

尚しやう○西堂さいだう東堂とうだう○首座しゆざ

藏主ざうしゆ典主てんしゆ書記しき行堂ぎやうだう僧そう

正せい僧都そうと法印ほふいん法眼ほふがん法ほふ

橋はし阿闍梨あせり檢校けんぎやう法師ほふし

法躰ほふたい禪門ぜんもん入道にゅうだう護心ごしん

山浪やまなみ 倭夷やまとあり男女おとこのこ

望夫石ぼうふいし 昔むかし貞女せいじよありその夫おとこ役やく

に赴ゆく弱子じやくしと撰せんて後のちに武ぶ昌ちやう

北きたの山やま上うへに送おくり立た屋やに化かして

石いしと名なす又また忠ちゆう州しゆうに「相思草しんしきやう

望夫ぼうふ楊やう望夫ぼうふ妻さいあり ○領巾りやうきん 婦むすめを夫おとこと慕こひて道みち

に化かして善ぜんと成なりと ○山やま 肥ひお松まつ浦うら形かたちあり左ひだり

尤風ゆうふう 肥ひお松まつ浦うら形かたちあり左ひだり ○石いし 彦ひこが妻さい依よ用もち媛ひめが古ふる

○手児名てこな 風かぜ 郎らうの婿むすめとちる尤ゆう出でて出でら

○夫婦ふうふ 當あたり大だい風ふうと名なす天あま下したの婦むすめ人の

○智入ちいり嫁娶よめむすめ婚禮こんらい 為なる又また南なん旅りよと阻さむむと名なす尤ゆう

○媒まへ 郎らう貝かい捕と ○房ふ 中ちゆうの門かどあり

○洞房どうぼう 洞房どうぼう兩りやう株かぶ合が飲いん花か ○翠すい

○帳紅閨ちやうこうい ○肉屏にくびん 房ふ中ちゆうより

○後宮こうきゆう 禁闕きんくわつ中ちゆう美人びじん人ひと

人の名な美人びじんと画え 是こゝ漢かんの元もと

王照君わうしやうきんが胡地こち小嫁せうよめを 是こゝも王わう

故事こじあり ○返魂へんこん 故こ事じあり

○香かう 武帝ぶていの夫人ふじん李り ○香かう 薰物くわんぶつ

待まち。黄熟香わうじやくかう。十種香じゆうしゆうかう。麝香じやくかう

○三夕香さんせきかう。吳越香いづゑかう。沉香せんかう。國彩こくさい

妓の幼稚 ○白眉神 妓院よふる
ふりよふ神こ

○鶺鴒 俗よちてとふ
妓掛の老女 ○陰

間 男色と
ひまじ老 飛子 旅陰
間 ○金剛

○野郎 伽やらふ 江戸小舟ま
んぢう大坂よ

て伽やらふ又 ○亡八 茶街小ぢひ
き仁美礼智

孝悌忠信のハツと亡 ○暁傘 元禄
ふぢよ七八とハ云

江戸吉原の茶街中後期雨ふまを
傘と交まりこき暁傘といふ其角

が不ととき暁傘と ○神媒 ○

形見 かまこの肩の髪をか
この髪をこの髪 ○恪氣 三つろ
つめこ

○肌ふる ○共白髪 ○縁 ○

小 ○えん結び ○浅 ○仇ら登

飛紅 ○父無子 子とをろ

ま ○かいよえ 虫の印 可ろ

びあひ 心男ふく ○

屍目つうひ とうとやま 忘

らる 古さる 刃さる ざ

近まより 非恋詞 後家

賤女 市女 下女 桂女

無常の詞 こまを哀傷と名よま
こまの哀まよといふ

塩干山 あさせ 鳥辺野

の烟 舟岡 ○茶毘場 火薬
場

茶毘の烟 無常の烟 死

出の山 死の孫
ゆらぬ孫 みつせ川

翁おきな○賤かたじけなく○愚おろそか尉ざう○座頭ざとう

警おび女にょ○病びやう○草くさの菴あん

柴しばの戸と

人倫にんりんの詞ことば雲うみの上うへ人ひと

武士ぶし○侍兵しやくべい郎らう

等ら○葵あひ者もの○使つか者もの○医い師し○鑄ちゆう物もの師し

佛ぶつ師し○繪えい師し○鑄ちゆう物もの師し

儒にう者もの○僧そう

農のう人ひと○商しやう

人ひと○職しやく人ひと○伶れい人ひと○藝ぎ

者もの○翁おきな姥ばあ○六む尺せき伯はく朱しゆ

者もの○番ばん太た○獵りやく人ひと

舟ふね人ひと○桂けい女にょ至いた身み我われ獨ひとり他た

関せき守しゆ田でん守しゆ○洛らく邑い○苗めう代だい守しゆ

綱つな代だい守しゆ○月つきののあはれ

姉あね妹いもうと○海うみ士し○民たみ○狂くる人ひと○御おん乳にち

母はは○衆しゆ徒と○樵せう夫ふ○鷹たか匠しやう○警おび

女にょ○盜たう賊そく○山さん盜たう○海うみ賊そく○孫まご

且かつ○若わが君きみ○臣おみ下した○恋こひの君きみ

嫂あやめ妻つま○長なが者もの○伯はく父ふ○伯はく母ぼ

祖そ父ふ○祖そ母ぼ○姑こ○舅きゆう○娘むすめ○姪むすこ

孫まご○児こ尉い○御おん傳でん母ぼ○御おん師し

能のう太た夫ふ○任にん丁てい○道だう心しん者もの○屠と

兎男女「友達」内儀「師匠」
喝食「同宿」博士「酒醉」
張

非人倫詞「東宮」皇女「門跡」

公家帝「親王」宮女院「本」

院「仙洞」新院「太子」天君

人間入道「山姫」仙人「長老」

二門「一家」六親「奉行」雜

式「給仕」典藥「下戸」眷属

「祖師」我君「橋姫」本道

「外科」老若「俗大勢」勢

樹「人形」龍本後耳「啞」音

目○代官「目代」目付○月

と友「花」と友「月」とあは

いづれも法者まともよ登の
まゝもまゝ人稱よあらまゝこ

居所之詞「家」家居○位居
○小家○古家「門」

戸「背戸」窓「部」格子「障

子」殿○角の内○さる角○角作
角の角○淵角○釣どの

○不そ ○樓言樓
樓上 ○宿言宿
茅草 ○屋

よもぎふの者○者の板戸○
むぐらの名○あまじよわじ

○あづまや○まろや○まや○かろや○
管や○まや○もや○あまらや○ひとつや

城「天守」亭「玄閣」屋形本
形

路地「棟」軒「棚」床「庵

里「村」天井「廣間」見世

「部屋」廊下「臺所」座敷「壁」
「居間」母屋「湯殿」納戸「屋」
根「欄干」築地「垣隣」藏
椽「火燧」坪内「鴨居」圍
爐「篋の子」田「爐裏」礎
「簾」井筒「走」畳「暖簾」
「外面」番所
「非居所詞」寺「室の戸」築山
「堂」皇居「内裡」塔「伽藍」方
丈「宮社」眠藏「柱」庫裡
「辺土」竈「火燒屋」

夜分之詞 神樂「日待」明星

七夕「夢」夢想多○鳥「稻」
妻「宵やこ」あぢく月よ
こ玄三ヶ月の入「明方」有
明錢「東雲」暗○霰走「掃」
頭綿○住吉の市○炬火
「灯籠」桃燈「行燈」燭臺「燧」
燭やもび○漁火「花見」
埋火「家交て」まどろむ中
寝かじく「善はて」床
狐○照射○蚊遺火「舞鶴」
別の鳥○鶯「鼠」蚊「名の」
寝○苔延「あぢく」東雲

蝙蝠ふつ「螢」鵜舟ういふね○あぶら火

短檠たんけい「送り火」○油あぶら續つぎ油あぶら突つ

卧ふし「ぬぐと」轉うつり寐ね起おき「衾枕しんしん

「時」鐘かね「深更」○紙燭しそく「手燭てそく

初鳥はつとり「鶉川」規わき狩し網あみ代しろ床とこ

衛士ゑしの焼火やきひ「燎ほ」電灯でんとう○星

と唱とな○追難おひな○産女うぶめ「化物かぶつ

「夜や」戔つ君みこと

非ひ夜や夕ゆふ詞ことば法灯ほふとう「鐘霞かねがき泊とど夏なつ

神樂かみがら「その曉あけ」をを夜よ「焼やき

火ひ「芦火あしひ」御火みひ焼やき「常とこの燈あかり」○

夜よと待月まちづき○明あきもつる。明あき果はぬ
明あきもつる

○あき明あきの入い三さんヶ月げつ出でるけ

ふの月つき「けふの蓬よもぎ」朝あさ朗らう入い相さう

座ざ禪ぜんの床とこ「泊とど狩し」○一夜いちや酒さけ

泊舟とどふね○夢ゆめ幻まぼろし
現ま

山類の詞

山やま「嶺みね」嶽たけ「岡おか」岨さへ「坂さか」谷やま「尾お

上かみ「高根たかね」麓ふもと○瀧たき島しま「棧せき」松まつ

木き「炭すす」竈かまど「山やま」姫ひめ「山やま」堵と「浮島うきしま

「小島こしま」小塩こしほ「山やま」梨なしの類るい「山やま」鳥とり

の類るい○山やま「ある」関せき。空そら坂さかの
関せき。白しろ河がは

の関せき。足あし柄がらの
関せき。不破ふたけの関せき ○五山ごさん「葛城かき」○了りょう

この岩いわ橋はし。
久米路くみじの辺へ

非山類詞 鷗の峰 雪山島

國 淡路島 山科の宮 富

士川 竜田川 水曾路 鈴

鹿路 小野 吉野 岩橋

瀧津川 初瀬 三島 岩屋 宇

治の川 島 松人 炭焼 瓜水

新山 賤 仙人 下野 猿 越

路

水辺の詞 海 浦 濱 江 湊

溜 島 沖 岸 堤 沼 汀 川

水淵 瀬 洲 滝 泉 井 溝

寄 淡潮 汐 波 氷 流 舟

橋 筏 網 釣 清水 笕 閘

伽 氷柱 温泉 塩焼 浮

水 釣瓶 下樋 浮桶 蛸壺

海士 狸 和布の類 龜

水鷄 守宮 水鳥 千鳥 都

鳥 鳩 藻 住虫 魚鱗

の類 橋姫 夏神樂 放生

會 御稜 月の氷 水辺

月の出 滲漂 水

水 水屑 蛇籠 藻 運 戸

濱 荻 杜若 菖蒲 真

薦 萍 菱 流水 氷魚

田井「柴漬」亀井○里の
蟹「水主」湾せうみやま「藻」住吉神
三井寺「清見寺」志賀の
松「大津」明石「粟津」須戸
松島「三丁」小島「難波」
津「浦」ある関「瀬」濱木
綿「非水」辺詞「難波寺」志賀
住吉「大井」粟つが原「天の
う」兒橋「泪川」みつせ川「夢
の浮橋」高津の宮「白川の
関」月の水「軒の玉水」布曝
を「室の八」句くま「詞の海」田の

箕「苗代」○菅屋「横川」小
田の梯「霞のう」硯水「さ
の渡」○管せけ蓮肉「蓮の上
娶る」○岩舟「くもり貝」淀
「思ひの淵」松浦姫○龍干
魚「干貝」乾海いり嵐「天水」鵲
の橋「紅葉の橋

季よきはなはなはなはな初附雜の冬詞

葉守の神「梅の宮」雪山か
とあり「和泉の國」放生川
櫻川「榊が浦」柳の水「橘の
都」藤原の都「柞の木林」富

士の雪「菜つみ川」鹿の角「藻
住虫」鳥「その虫」かいつむ
り「鶴の巢」鷓「集」都鳥
「玉ひび」かどす「雲雀毛の
駒」黒牡丹「干魚の類」櫻
「柏」椋「干種」菜「畠」菜「末
摘花」空蟬の君「落葉の宮
薄殿」茶の花「香」菜飯「菜
汁」いけ栗「梅干」煮梅「干
わらひ」いり豆「鶉の巢」經
帽子「野遊ひ」頭の雪「眉
の霜」梅壺「柳橋」箏笠「網

代屏風「網代車」黄泉「詞
の花」花娘「花聲」花の帽
子「花田」花うつと「茶ゆり
浪の花」茶のまこ「茶む
ら」花子の狂言「花の帯」糸
かいらき「造り花」茶かつ不

「花丁子」花山の文まをいれんを
ものさし

春の月「月花」朧月夜「朧
影朧とむらり八月又あらむを
朧の夜とつむおぬ

夏の月「鉾の月」夏の夜の霜

秋の月秋よもさる
よまきハ畧之ヲ○月の雪
月のさやをさそよそ
ふまのよはあらむ月の霜あま
同ド

但表ハ秋も隊ものききハ句
よよりてあるものときまり
夜分

何ふる秋の月三ヶ月出「夕の

月「朝の月」昼の月「暮の月

「夕月」繪よかたる月上旬の月

てハ花分よあらは。ト旬の月
入るとしてハ花分よあらは

字を合する時秋月は用る分

「玉兔」「玉蟾」かはら男「常娥

「嫦娥」「盃の光」「盃の影」待

宵の影「いさよひ」「有明」

ゆら男

「冬月」「寒月」「さむる月」「月の

氷牙る月之水也
小ハあらは

「雑の月」「心の月」「胸の月

「夏の正花」「余花跡余」「若葉の

花ち葉の「花小杜鵑さよけく

るり

「秋の正花」「花火夜分」「花相

撲植物よ「花燈籠夜分

。灯籠植
物よあらは

「冬の正花」「帰花りりり

「餅花植物食類」「雑の正花

作り花植物よ「繪の花上」花

結び造り「花真壺茶の壺

之後の花「花鞞鼓」花形茶植

物はあ **「花塗」**花かいらざ 鮫 靴

らま **「茶の花香」** 食

はもやうあるは **「茶の花香」** 食

の香は **「燈火」** 人福

く **「花子の狂言」** なり

花 **「花鯉」** 食 **「花毛氈」** やうせん

花の種 **「花筵」** はなごけ 花の下の花

織り **「詞の花」** 花物

二句 **「声の花」** 花やき

去 **「花やう」** 茶の字に花まとも和訓茶

雪月茶八月茶の望 **「花紅葉」** 雪月花

系物 **「花實」** 上

非季の詞

○紫雲の祓 ○雪山 ○電 ○雷 ○雪 ○枝生川

○橘の類 ○柗の葉 ○柗の **「橘入」** 安

水 ○柗浦 ○柗田 ○柗川 沖

の説は **「詠訪祭」** 年々七十余交あり

むらさき ○鶯の巢 **「藻小をむ虫」**

○忘草 ○鶯の巢 **「黒牡丹」** 劉訓古車

秋 **「切字」** 万葉に欲得

をがら **「七か」** 欲得

女 **「治定の哉」** うへの詞を

て **「引きてのや」** 近

式 **「治定のや」** 上

中 **「かひのや」** も

詞 **「さき」** さき

や **「さき」** さき

を **「さき」** さき

○首尾 表六句五句 裏六句

句五句め ○三物幾句 才三句

句數同季四季とも 春秋不句去

三句より五句まで二句より 夏冬より

二句より三句まで二句より 戀より

五句より五句まで二句より 神祇より

但五句より二句より 無常より

句去二句去 釈教より

句去二句去 述懐より

句去二句去 山類より

句去二句去 水邊より

句去二句去 人倫より

句去二句去 居所より

句去二句去 生類より

句去二句去 植物より

句去二句去 衣類より

句去二句去 名所より

句去二句去 夜分より

句去二句去 降物より

句去二句去 聳物より

句去二句去 天象より

句去二句去

冠五言

道志志也
いその神
そのうらの
四方山を
横多ふ水
その谷小
母をいごふ
身成思ふ
月をめぐ
むやいそ
あるるそ
夕栄也
かあふは
事とそむ
茨老くも
山くすむ
咲 此
星をさく
えん之ま
山也む
山島此
曉の
潮かつけ

同

まが記の
淋しき小
日此乃也
田井町の
風流若
雲の巻
まむら
ああもふ
表や
舟虫此
あもま
日もま
あふり
口陵田の
若くも
箒ふ
手次は
まもあ
招き
何玉あ
あ海を
むきん
はめ

有明の
そかりく
はらわら
いふふ
木のふ
あはま
ふそ
月結
危く
時乃
あれま
あ月
廣沢
谷間
いそ
砂ま
乃そ
何の
変り
浦く
若織
いつま
んや
静さを

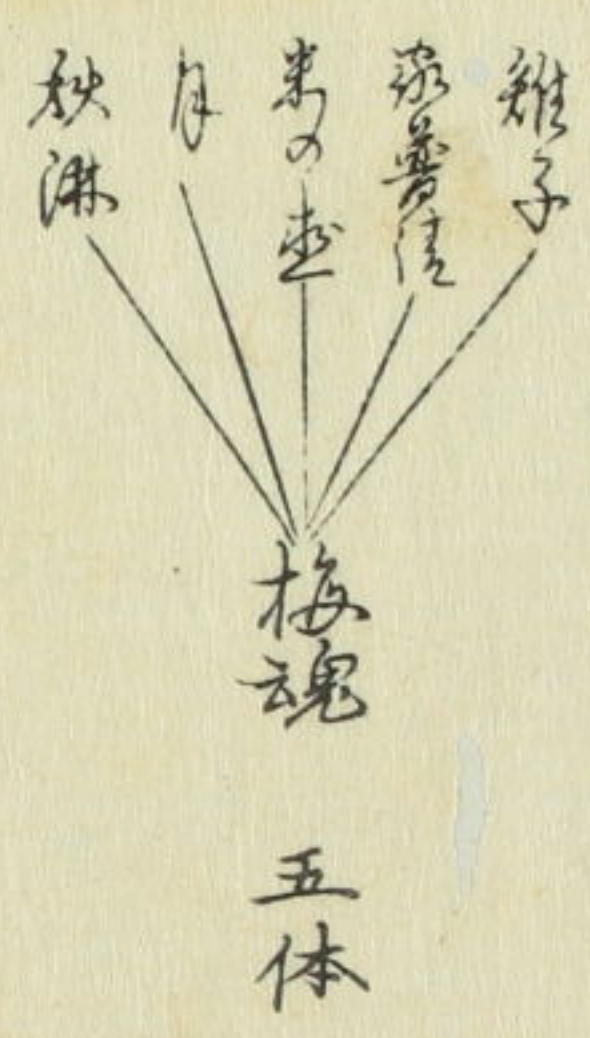
西向
新あ
か
あ
遠ま
ま
世の中
寺は
印
精
ま
日
香
堀
う
笑
青
ち
里
日
一
ま

苗代

ついでにあつたてゝ一四の
 形亦あつてくくくくくくくく
 ありきと海く會む一皆此を
 とぬて聯句とすく時ら正しく
 意味を海へて乃人の助と
 けんし久うよくにあつたあつた
 ちんうら

○表六句

梅の老ふの月と日のあつた海は
 ちんく小雛子の味へて其の
 味を信じて其の子を遠くを
 よのほくふよつたあつた
 ちんく内をりて世し月のみ
 穀城もよれ秋の雨き



○同

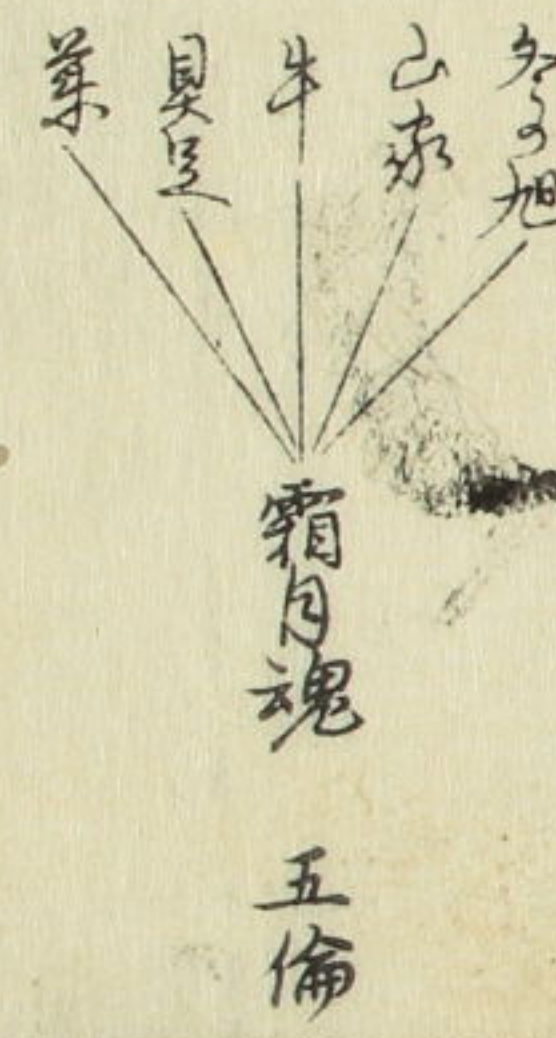
木枯のふし竹のふし
 たつたてゝ一四の

梅の老ふの月と日のあつた海は
 ちんく小雛子の味へて其の
 味を信じて其の子を遠くを
 よのほくふよつたあつた
 ちんく内をりて世し月のみ
 穀城もよれ秋の雨き



○同

梅の老ふの月と日のあつた海は
 ちんく小雛子の味へて其の
 味を信じて其の子を遠くを
 よのほくふよつたあつた
 ちんく内をりて世し月のみ
 穀城もよれ秋の雨き



○轉方

梅の老ふの月と日のあつた海は

酒を武士は 頼みぬ後を
小骨の如く 招き居る
入来り人 小中の様を
嘆けりし 松並み文を
ふりかきし 小六の文を
くさくさの 山の洞中
軍の中を 志すもふり
ちりく人を 生れけし
言低うを 坊主ふれど
涙あふを 飄ふあつて
つりし一 人のそいつ
星をばて かきあけ採り
髪をばて 臺よりあふ
身を恨む 何年かとい
恨むのし 半を自た
涙をひき いくつとま
福ありし 臺に
春をばて 重んぬく
そをばて けし
まの集あ 朝ふあ
風やうき 松結ぶ
松火まあ 養子ゆ
仮の内言 結みけられ
ふと書けり 正月の

あがりの 甲のちりく
何しとせぬ 公儀すく
目の内あり 只法ふ
忘とぬ 松
あがり 布橋
旅のしき 笠をま
まの向の けり
文珠の 世を
一とと くれ世
兼や 小唄
ゆふ 一吹
浮世の 舟の
力なき 舟の
舟の 舟の
静なる 舟の
徳も 舟の
四十八 舟の
小別 舟の
志なき 舟の
舟の 舟の
舟の 舟の
舟の 舟の

萬代り 十

荷持ひしうふ	あそひしうふ
船出更は	碁をゆ目ふ
森とふ不整	まの物集の
管て母ふ	命う色し
あけあつる	

五言

隠ししよ	あそひしよ
めりしよ	おのひ入
片及を	ふあう
竿竹ふ	日はあ
休すう	さし
物どは	あか
降あし	そち
尻将	むさ
店さし	うら
俺ちれて	そち
波おり	そち
好し	世の中
唇あ	わら
乃さ	らう
志ぶ	やち
漸さ	お
うま	手

あが	あ
甚	あ
馬	あ
娘	あ
障	あ
号	あ
道	あ
面	あ

冠五言

い	あ
歡	あ
旅	あ
油	あ
股	あ
大	あ
加	あ
入	あ
下	あ

同

あ	あ
あ	あ
あ	あ
あ	あ
あ	あ
あ	あ
あ	あ
あ	あ
あ	あ

のどけりや 引すはし 夜 袴 月より高 さるや 少く小ね 堂一木 むら夜	夕まはら 菊は秋は 山川や 面もく くもは 山の端 ねりほ
---	---

沓五言

同

鼓 立て 宿りり 羽おきて 夾とれて 拾ひせ 川あえて 舟新ふ 御殿まで あはれて 春を今 あまう 啼出して おひり うらけ	袴 立ち 雪あり 失ふ願 さし をのま 穂ふ出 秋を 乃あり を付 雨降 貝吹 川く 夾り
---	---

病を あま 免を 中 清 通 有 有	時 轉 川 さ 縁 お 幽 速
---	--------------------------------------

序題曲

元日小田 毎の日にを忘る

秋の夜を打寄る

○服五体 ○お添

枯枝子鳥とありたり

○遠附

月夜の思ふ針をむき入

○在附

秋の夜は先ふよはる

○頃附

秋小涼てはる末小松川

坊（小虫のきささ） 頃
○對附

高良古重七堂伽藍八重様
暖玉所む三の五縁の立

○牙三向法○杉形○太山
むすむ け和定よ ありて
ねの屋 綴活の研の 通ひ来て

○十五方附方

理（甲斐支の根方ハ香の御影木
没物の玉塚あり夏木を

違（涙の心も軍一宮中
松屋ふひとうを仏多夜にて

離（縁はらき物とふあそびあそび
さうくさうくと雨うくく

其（雛殿うんやハ又斬うく
春公さうき形ふをわりの

其場（繩子とわりてままあそび
さうさうさうさうさうさう

時分（さうくと文郎不機さうさう
あはれくと時六のうり

時候（息文不机父の公袋うり
堪忍あそび七クのさう

景色（又も大さうの報とあそび

向附（堀の中におおきく色とあけ
江戸のた右向の考と書其て

迎（さうあはれいと花向とさう
妹とよハあそびあそび

心（俗部あそびと先みとあそび
麦畑のあそびとあそび

郷（町内の秋更けのあそび
何とあそびあそびあそび

境（星とあそびあそびあそび
いあそびあそびあそび

包（あはれハ一巻の包いあそび
百白ハ百白あそびあそび

先あそびあそびあそび
さあそび

右十七ヶ條畢

白雄房昨鳥著

原書有誤馬者今正此
十時蕉華庵乙彦

俳諧初書目

俳諧寂榮 白雄坊撰 三冊

發句五百題 同撰 二冊

故人五百題 松露庵撰 二冊

新五百題 田喜庵撰 二冊

新々五百題 二冊

近十家五百題 過日庵撰 二冊

近百家五百題 二冊

文久五百題 二冊

元治五百題 二冊

安政付合集 青居新甫著 二冊

蒼虬翁付合集 同撰 一冊

持扇跋

黃鸝嘆老杜鷓鴣翔壯黃梅
天間居愛無事親四友蕭
然消日矣俄一書賈捧
而進啓視之乃俗稱俳諧
季寄者而卷末併載白雄
之苗代水一書蓋源出於
年浪草而汲玄同之歲時
記下流以別為一支川者
也然其源流悉非清水而
濁水交有流傳宜不拾捨
謬損味惜哉這書隨流沿
習而不擇音濁當為補習

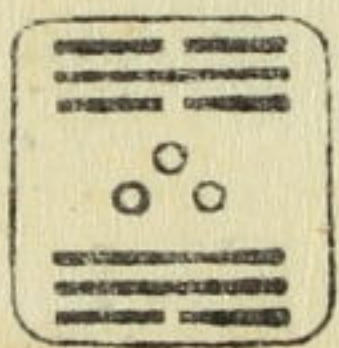
學之便覽乎既刻成無如
之何ヲ要ク知ル其事々々物々之
正誤者有積讀書之功焉
出格亦可有其期余爲書
賈聊訂正文字誤脫而一
時煩レ机上之四友加勞レ卒
方先生而已

音

慶應歲次丙寅天中節日

江都萩原乙彦識於葛

本



日本橋通一丁目

須原屋茂兵衛

同

二丁目

山城屋佐兵衛

同

所

須原屋新兵衛

銀座三丁目

山城屋政吉

芝神明前

和泉屋吉兵衛

同

所

岡田屋嘉七

横山町三丁目

和泉屋金右門

淺草茅町三丁目

須原屋伊八

池ノ端仲町

岡村屋庄助

上野御成道

英録文藏梓

